売薬の意匠あれこれ　琺瑯（ほうろう）看板―その3

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長　平井 有（ひらい・たもつ）

本誌99号、100号では、近代（とくに昭和時代）の看板広告の歴史には欠かすことのできない琺瑯（看板）を紹介しました。今回も引き続き有名売薬を中心とした琺瑯（看板）を取り上げます。

①

②

③

④

⑤

①「メンソレータム」

前号にも登場した「メンソレータム」の琺瑯（看板）ですが、字体が右から左へと書かれていますので、少なくとも戦前のものと思われます。

「メンソレータム」は明治27年（1894）に米国で開発されました。日本には明治38年（1905）に宣教師ウィリアム・メレル・ヴォーリズによって伝えられ、のちに近江兄弟社によって国産化されたのですが、この看板に書かれている「世界の家庭薬」がそのキャチフレーズでした。

なお家庭薬という言葉が公に登場するのは、それまでは売薬と称されていたものを戦後の昭和21年（1946）に厚生省（当時）によって「家庭薬」と規定したのが始まりで、現代ではOTC医薬品などとも呼ばれています。

②「養命酒」

伝統家庭薬のなかにはその始まりが江戸時代以前のものも多くありますが、「養命酒」の起源は400年ほど昔の慶長年間、安土桃山時代にまでさかのぼります。

薬用酒には単純に薬を酒に溶かした「加薬酒」や一定期間生薬を酒に漬けた梅酒のような「浸薬酒」、酒を醸造する過程から生薬を仕込んだ「発酵薬酒」などがありますが、「養命酒」は（原酒の）みりんに2000日以上かけて生反鼻（はんぴ：マムシ）や薬草を仕込んだ発酵薬酒です。

江戸時代、赤穂浪士が仇討ちに備えて江戸市中に潜伏した際には、この「養命酒」で鋭気を養った史実もあり、また幕府からは「天下御免万病養命酒」との評価を受け、神通力の象徴である飛龍の絵を用いることを許されたものです。

③「浅田飴」

最近は先発医薬品よりも飲みやすさ（服用しやすさ）を追求したGE（後発医薬品）が開発されるなど「良薬は口に苦し」ということわざが死語になるような時代ですが、この「浅田飴」は今から130年以上も昔の明治20年（1887）に「良薬にして口に甘し」という逆説的、斬新的なキャッチフレーズで売り出されたユニークな水飴状の薬（舐薬：しやく）がはじまりです。

その後、現代でも販売されている固形の「浅田飴」へと改良されましたが、この「浅田」の名前は大正天皇幼少期の侍医まで務め、最後の漢方医と呼ばれ『勿誤藥室方函口訣』などの多くの医書を著した漢方医浅田宗伯に由来するものです。

④「ロート目薬」

ロート製薬は、明治32年(1899)に奈良県出身の創業者山田安民（やすたみ）翁が、のちに「パンシロン」へと進化する胃腸薬「胃活」を製造販売するために、大阪の東心斎橋で開業した「信天堂山田安民藥房」がその始まりです。

当時の日本ではトラホームの流行はじめ、結膜炎などの眼病を患う者が大勢おり、「胃活」に続く商品として目薬の製品化を計画、当時のミュンヘン大学のロート・ムンド博士に師事した東京眼科病院の井上豊太郎博士の協力のもとに生み出されたのが「ロート目薬」で、明治42年(1909)に発売され大ヒット、そのキャッチフレーズが「シマズ　イタマズ ロート目薬」でした。

⑤「恵乃玉」

①～④のような現在も続く有名メーカーの売薬の琺瑯（看板）ではありませんが、昔の病名でいうと（病的な）帯下（たいげ。こしけ。おりもの）に対する薬「恵乃玉」の琺瑯（看板）です。日本薬局方・製剤総則の10に掲載の膣錠、膣用坐剤に相当する製剤です。

この製剤としては現在でも抗生物質製剤の「クロマイ膣錠」や抗真菌薬の「エンペシド膣錠」「オキナゾールL600」、卵胞ホルモン・エストリオールが成分の「ホーリンV膣用錠」などがありますが、「恵乃玉」は帯下の他、子宮病、血の道などにも効果のある「子宮座薬」として宣伝されていました。